

## 会員研究

# 慶長遣欧使節団、伊達正宗の夢と

## 支倉常長の悲劇

長谷川 憲司

はじめに

慶長年間（1600年代）にメキシコ、スペイン及びイタリア・ローマに派遣された「慶長遣欧使節団」について、歴史家の定説は、使節団は徳川幕府と奥州の伊達藩が協力し、メキシコやフィリピンとの直接貿易交渉を目的として派遣されたものでありとされているが、近年の研究によって、果たして「慶長遣欧使節団」の本当の目的は何であったのか、様々な説が提起されている。特に、歴史研究家の大泉光一博士は、難解なロマンズ語（ラテン語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語）の習得に30年の歳月を費やし、現存する原文を読み解いてきた。彼は長年の研究の末に、この「慶長遣欧使節団」派遣は、伊達政宗の壮大な計画、つまり「幕府転覆計画」が陰に隠された目的

であったと指摘している。今も『ヴァチカン機密文書館』に保管されている当時の様々な資料や遣欧使節団の渡航経路に残されている資料から、政宗はスペイン国王とローマ教皇の協力を得て、日本に「カトリック騎士団」を創設、騎士団の武力で、当時まだ盤石な基盤を築いていなかった徳川幕府を倒し、「日本国王」になるという壮大な夢、計画が練られていたことを窺い知ることができる。

以下、「慶長遣欧使節団」と遣欧大使を務めた伊達家家臣の支倉常長及びキリスト教宣教師ルイス・ソテロの渡航記録を大泉博士の研究結果を中心に紐解いてみたい。

慶長・元和の関連年譜  
・慶長5年（1600） 関ヶ原合戦

・慶長8年（1603） 徳川家康（征夷大將軍）幕府を開く

・慶長10年（1605） 徳川秀忠（征夷大將軍）第二代將軍

・慶長17年（1612） 3月幕府直轄領で禁教令発布

・慶長18年（1613） 2月

全国で禁教令、バテレン追放令

・慶長18年（1613） 8月

キリシタン禁制義務化を全国に通達

・慶長18年（1613） 9月

慶長遣欧使節団出発（当時、政宗47歳、家康72歳）

・慶長19年（1614） 12月

大坂冬の陣 ※キリスト教信者数137,500万人

・慶長20年（1615） 5月

大坂夏の陣

・元和2年（1616） 4月 徳川家康死去

・元和6年（1620） 8月 慶長遣欧使節団帰国

時代背景と派遣に至る過程

大航海時代（15〜17世紀）

にヨーロッパ勢力は、世界各地に植民地を造っていた。先行していたのはカトリックのスペイン、ポルトガルであり、太平洋地域に

於いてスペインはメキシコ、フィリピンを植民地としての利益を上げ、ポルトガルはマカオを拠点にしていた。一方、遅れをとっていたプロテスタントのイギリス、オランダも遅れを取り戻すべく積極的な活動をしていた。

こうしたなか、慶長14年（1609）、前フィリピン総督ドン・ロドリゴの乗ったサン・フランシスコ号がメキシコへの帰途台風に遭い、上総国岩和田の海岸で座礁難破した。地元民に救助された一行に、家康がガレオン船を贈りメキシコへ送還した。その後、メキシコ副王大使セバスチャン・ビスカイノが、スペイン国王フェリペ三世の親書を携えて、御礼のために家康を訪問した。この時家康は、メキシコとの通商貿易や銀鉱石製錬技術を得ようとして交渉したが、通商貿易のみを求める幕府とキリスト教布教を条件とするビスカイノとの間の交渉はまとまらなかった。当時のスペインの基本政策は「商教一致主義」で、通商貿易とキリスト教布教は一体化されていた。家康はスペイン側の要求であるカトリックの布教を許せ

ば、日本が植民地化されかねないと考え、友好的な態度を取りながらも全面的な外交を開くことはしなかった。当時家康は「商教一致主義」を取らないプロテスタント国オランダとは慶長14年に、イギリスとは慶長18年に通商交易を開始している。

伊達政宗は、メキシコ（更にスペイン）との積極的な貿易を考えていたので、家康の許可を得て、幕府と伊達藩合同の「メキシコ通商使節団」（あくまでメキシコとの貿易が目的）の派遣を行うことを幕府と相談して推進していった。

当時政宗は、懇意にしていたフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロに伊達藩領内での伊達家臣や領民へのキリスト教布教を許可し、キリシタン保護の姿勢を示していたが、慶長16年（1611）には、ルイス・ソテロの伊達藩領内での布教活動を正式に認めた。

慶長16年11月10日、正宗はセバスチャン・ビスカイノ大使を仙台城に招き、スペイン国王やスペイン総督と親交を厚くしたいと希望を述べた。大使も

正宗がルイス・ソテロを厚遇していることに感謝し、政宗が希望する貿易の振興には、キリスト教を布教させることが最も効果があると述べている。

#### 幕府と伊達藩合同の「メキシコ通商使節団」の派遣が決まり、幕府は朱印状を発行した。幕府船奉行の向井将監忠勝の協力を得て、牡鹿半島月ノ浦で「サン・ファン・パプティスタ号」（500トン）の製造を行った。造船技術と航海技術に関しては、ビスカイノの支援を受けている。大きさは、横約6m、長さ約21m、高さ約16.5m、帆柱約19mの当時としては巨艦ガレオン船であった。

使節団派遣に関して、ソテロの企みと渡航先の変更の進言で、政宗は重臣達の反対を押し切り、使節団をメキシコだけでなく、極秘にスペイン国王とローマ教皇とのもとにも使節団を派遣することを決断する。これについては、通訳兼折衝役のシビオーネ・アマチの書いた「政宗遣欧使節記」に記録が残っている。ソテロは、慶長17年からの幕

府によるキリスト教弾圧に絶望を感じており、親しい関係にあり、キリスト教に理解を示す伊達政宗を使って、徳川幕府を倒すしかないと考えていたようである。更に、ソテロは日本において「司教」の地位に就くことを狙っていたのである。派遣の目的は、当初幕府の意を受けて、メキシコ、フィリピンとの直接貿易の拡大であったが、ソテロの野心と政宗の思惑が一致してこのような変更が行われたらしい。

#### 事

慶長18年、徳川幕府によって、キリスト教禁教令、パテレン追放令など全国的に幕府より通達がなされ、キリシタン弾圧が始まった時期であるが、遣欧使節団は正使として支倉常長、副使としてソテロ、幕府奉行向井将監の家臣、商人など合計180余名が乗り込み、慶長18年（1613）9月15日に牡鹿半島の月ノ浦港を出航した。約3か月懸かって、慶長19年（1614）1月下旬に、一行はメキシコのアカプルコに入港し、メキシコ市への入国許可待ちでアカプルコに滞在した。慶長19年（1614）3月24日、常長らはメキシコ市に入った。ここで、日本人随行員一行のうち商人らが集団で洗礼を受けている。これはカトリックへの信仰心と言うよりもソテロから、商人達が洗礼を受けることで、商取引を円滑に承認して貰えると言い含められていたからであったようだ。実際、商人達が用意した日本からの品々は、思い通りメキシコで取引され、更にメキシコの羊毛や羅紗も買い入れること

ができた。一行は、メキシコ副王グアダルカサル候に謁見して、政宗の書状と進物、及び家康からの進物などを手渡した。同時に使節団は、当初の目的であるメキシコとの貿易の許可を申し出たのである。更に、常長は、幕府の許可を得ず秘密裏に、スペインおよびカトリック教を優遇するとして政宗作成の伊達藩とスペインとの間の8カ条の一申合条々の締結を、メキシコ副王に申し出ている。しかし、日本との貿易はスペイン王の許可が不可欠であることが言い渡された。

慶長19年(1614)5月8日、常長、ソテロ、伊達家家臣、日本キリスト教界代表者ら29名は、帰国する幕府側と別れ、スペイン、ローマへ向けて独自に出発した。キューバのハバナを経て、10月スペイン南部のサンルーカル・デ・バラメータに到着。更にソテロの出身地セビリアに入る。12月20日、スペインの首都マドリッドに到着。慶長20年(1615)1月30日、一行は、スペイン国王フェリペ三世に謁見し、政宗の親書と進物を手渡すと同時に、フランシスコ会

の宣教師の日本への派遣を強く要請した。しかし、政府のインディアス顧問会議が、常長らの請願を拒否する意見書をフェリペ三世に上申したため、請願が却下されたのである。2月17日、常長はフェリペ三世ら臨席のもと、王立修道院の付属教会で洗礼を受けた。洗礼名はドン・フィリップ・フランシスコである。この洗礼も常長の本意ではなくソテロの企みであり、使節団の使命達成の手段であったようだ。インディアス顧問会議は、常長らが更にローマに赴いて、ローマ教皇に再度請願し、これが承認されることを懸念して、ローマ駐在のスペイン大使に連絡し、常長らの請願がスペイン国王に却下された事実を事前にローマ教皇庁に伝えている。

このように一行はスペイン政府との外交交渉において、何の成果もあげられず、最後の望みを胸にローマ教皇に拝謁するために日イタリヤのローマに向かったのである。

元和元年(1615)10月25日、ローマに到着。ローマ教

皇パウルス五世に公式に謁見し、政宗の親書と進物を贈る。現在もこの親書は、ヴァチカン機密文書館に残っている。親書の重要なポイントは3つある。

①政宗がキリシタンになりたいと思っではいるが、今のところ事情があつて、まだ洗礼を受けていないことを告白、②スペインのフェリペ三世と交渉に入るという目論見の説明、③常長とソテロが口頭で申し上げること(幕府に知られたくない機密事項)を聞いて欲しい事。

ヴァチカン機密文書館に残されているローマ教皇の小勅書および異端審問会議の決議による回答文書には重要な点が残されている。内容は、政宗を日本における「カトリック王」に叙任して欲しいという請願と日本に「キリスト教徒騎士団」を創設したいという請願であるが、教皇庁は政宗は現在洗礼を受けていないという理由でこれを拒否している。今後、政宗がカトリックの洗礼を受ければ、「カトリック王」に与えられるあらゆる権限とローマ教皇の保護を受けられるし、教皇支配下の「キリスト

教徒騎士団」も認証されるとも記載されている。

元和2年(1616)1月7日、常長とソテロは当初の目的である貿易の許可も叶わず、失意の内にローマを出発し再びスペインへ向かう。その間もいくつかフェリペ三世から政宗宛の返書を要求したが、一年以上待っても親書は貰えず、最終的には国外退去を求められ、元和4年(1618)4月2日迎えのサン・ファン・パウティスタ号でアカプルコを出港。同年8月10日、フィリピンのマニラに到着した。サン・ファン・パウティスタ号をマニラでスペインに売却し、常長は便船で元和6年(1620)8月24日日本へ帰国した。

ソテロは別行動を取り、元和8年(1620)9月18日、マニラから日本に密入国しようとしたが捕らえられ、寛永元年(1624)7月12日に火刑により49歳で殉教した。

日本では幕府及び伊達藩がこの件を極秘にしたため、ほとんど知られていない。「慶長遣欧使節団」に関する事柄は、明治5年(1872)5月29日、岩

倉具視全権大使一行が欧州巡覽の途上、ローマの図書館で支倉常長の書簡や記録を日本人として初めて発見したとされる。

### 帰国後の支倉常長

はるばるローマまで往復した常長であったが、その交渉は成功せず、そればかりか帰国時には日本ではすでに禁教令が出されていた。そして、帰国して2年後の元和8年、失意の内に52歳で没した。常長らが持ち帰った一部の「慶長遣欧使節關係資料」は現在、仙台市博物館に所蔵されており、平成13年(2001)に国宝に指定されている。また、2013年にはユネスコの「世界の記憶」に選定された。また常長自身が記録した訪欧中の日記が文化9年(1812)まで残存していたが、現在は散逸しており幻の史料となっている。その後の支倉家は嫡男常頼が後を継いだ、寛永17年(1640年)、家臣がキリシタンであったことの責任を問われて処刑され断絶した。しかし寛文8年(1668)、常頼の子の常信の代に許され家名を再

興した。

常長は帰国後、政宗の命令でキリスト教を棄教したらしい。イエズス会が常長を棄教者として扱っているために、現在、日本カトリック中央協議会も棄教者としている。

### 政宗の様々な幕府への対策

(1) キリシタン弾圧を強化  
慶長18年(1613)、幕府

が禁教令を拡大し、取り締まりを強化すると、政宗は領内に逃れてきた信者を領内(福原)にかくまった。しかし、元和6年(1620)常長帰国と同時期に、つまり政宗は自身の野望が潰えたことを知って、幕府の方針に従い、領内全域にキリシタン禁教の高札を立てて、キリシタン弾圧を強力に進めたのである。

(2) 政宗に向けられた疑惑

「遣欧使節団」対して、徳川家康・秀忠は政宗に「謀反の疑惑」を向けていたらしい。

これは、元和6年(1620)11月30日付のイエズス会のアンジェリス書簡から明らかである。使節団の一部が、メキシコだけでなくスペインやローマを伊

達藩独自に訪問し、フェリペ三世やローマ教皇に面会したこと、メキシコまで同行し、先に帰国した幕府奉行の向井将監らが、ソテロ及び常長ら伊達家家臣が不可解な行動を取ったことを将軍に報告した。それで、政宗は常長が帰国してから直ぐに、この疑念を払拭するために、キリシタン弾圧を強化したのではないだろうか。

(3) 遣欧使節に関して消された記録

政宗は計画を幕府に知られた時のための対策を講じていた。それは、大使の人選は伊達家の重要な人物を外していたこと。また、証拠になるような書簡や記録は一切残しておかなかったこと。政宗の親書にも直接的な内容は記載しておかなかったこと。機密事項は全て常長らが口頭で行ったこと。随行員の姓名や素性などは、帰国後も極秘扱いにされたことなどである。

### 支倉常長についての個人的考察

伊達政宗は何故、藩の運命を左右するかも知れない重大なスペインとローマへの遣欧使節団の

大使の役目に支倉常長を選んだのであろうか。支倉家は伊達家の中で、下級武士の召出衆であった。常長はスペインに渡るまでキリスト教信者でもなかった。実際、スペインで洗礼を受けたのであるが、これも政宗からの使命を果たすために、本人の意に反して洗礼を受けざるを得なかったと考えられている。常長は布教の強硬派の宣教師ソテロに常意を見を押し切られる形で、行動したように伝えられている。しかし、8年もの歳月を費やして、何も得るものがなく、失意の内に帰国せざるを得なかった常長の気持ちや思うと心が痛む。渡航後、国内キリシタンへの弾圧がさらに強化されたことも、その後の伊達藩の支倉家への冷遇は悲しい結末であつたらう。

### 参考文献

- (1) 平重道「仙台藩の歴史 1」伊達正宗・戊辰戦争 宝文堂
- (2) 大泉光一「暴かれた伊達正宗 幕府転覆計画」文春新書
- (3) 大泉光一「支倉六右衛門常長『慶長遣欧使節』研究資料集成」(全3巻) 有斐閣
- (4) 大泉光一「支倉常長 遣欧使節の悲劇」中公新書
- (5) 遠藤周作「侍」新潮文庫